

第1章

妊娠・出産の実態

持田 聖子



この節では、結婚した理由や交際期間、妊娠の経緯、出産を決めた理由など、結婚から妊娠までの実態についてみていきたい。

●結婚した理由

現在の配偶者と結婚した理由について、15項目の中から、あてはまるものを選んでもらった（複数回答）。その結果について、妻全体と夫全体で集計し、妻の回答率の高いものから順に並べたものが表 1-1-1 である。妻・夫ともに、「一緒に生活したいと思ったから」という理由が突出している（妻84.2%、夫89.5%）。ついで、妻・夫ともに、「精神的な安らぎが得られると思ったから」（妻55.0%、夫48.1%）、「結婚する年齢になったと思ったから」（妻32.9%、夫37.0%）という理由が続く。「子どもが欲しかったから」という理由は上位 4 番目で、妻16.8%、夫20.1%であった。「子どもが予定外にできてしまったから」という理由は、妻9.1%、夫6.9%であった。妻と夫で差がみられたのは、「身の回りの世話をしてあげたかったから」（妻が多く、9.5ポイントの差）と、「身の回りの世話をしてほしいと思ったから」（夫が多く、11.6ポイントの差）であった。

結婚時の年齢を、24歳以下、25～29歳、30～34歳、35歳以上の 4 グループに分けて、年齢によって結婚した理由に特徴があるかどうかをみた結果、顕著な差があったのは 5 項目であった（表 1-1-2）。「子どもが予定外にできてしまったから」は、24歳以下のグループが妻19.7%、夫19.5%で、もっとも多かった。「親を安心させたかったから」「老後、独りではさびしいから」は、妻・夫ともに、年齢が上がると選択する率も上がっていく。夫については、「社会的信用が得られると思ったから」という理由で、35歳以上のグルー

プになると回答率が上がる。

「結婚する年齢になったと思ったから」を選択する割合は、妻は25～29歳（38.6%）と30～34歳（36.2%）が多い。夫は30～34歳（47.0%）がもっとも多く、ついで35歳以上の回答率が37.5%で、25～29歳（37.1%）をわずかながら上回る。結婚適齢期の年齢については、男性のほうが女性より幅があるようである。

●出会いから結婚までの交際期間

現在の配偶者と結婚するまでに、どのくらいの交際期間があったのだろうか。全体での平均期間は、妻 3 年 1 か月（最小値 1 か月、最大値 17 年 4 か月）、夫 3 年 1 か月（最小値 0.5 か月、最大値 17 年 0 か月）であった（本分析のデータは、妻と夫をカップリングさせていないことに注意されたい）。

結婚時の年齢グループ別にみると（図 1-1-1、図 1-1-2）、妻・夫ともに結婚時に30歳未満の場合は、交際期間「1年1か月～3年以内」で結婚する人が、24歳以下のグループでは妻46.2%、夫43.5%、25～29歳のグループでは妻38.6%、夫39.3%ともっとも多くなっている。30～34歳のグループでも、交際期間「1年1か月～3年以内」が妻38.9%、夫39.1%でもっとも多いが、「1年以内」の交際で結婚した人の割合も、妻34.5%、夫29.7%と多くなってくる。35歳以上のグループでは、妻・夫ともに交際期間「1年以内」で結婚した割合が 4 割を超えていた（妻44.8%、夫44.4%）。

表1-1-1 結婚した理由

	(%)	
	妻全体	夫全体
一緒に生活したいと思ったから	84.2	89.5
精神的な安らぎが得られると思ったから	55.0	48.1
結婚する年齢になったと思ったから	32.9	37.0
子どもが欲しかったから	16.8	20.1
親を安心させたかったから	16.8	17.6
身の回りの世話をしあげたかったから	13.6	4.1
老後、独りではさびしいから	12.4	12.1
子どもが予定外にできてしまったから	9.1	6.9
なんとなく	7.3	5.8
自分は結婚はまだだと思っていたが、相手が望んだから	5.3	5.3
周りがどんどん結婚したから	4.3	2.6
経済的理由から	4.0	2.9
社会的信用が得られると思ったから	2.7	6.5
身の回りの世話をしてほしいと思ったから	1.8	13.4
その他	3.0	1.7

注1) 複数回答。

注2) 妻全体=妊娠期妻+育児期妻、夫全体=妊娠期夫+育児期夫。

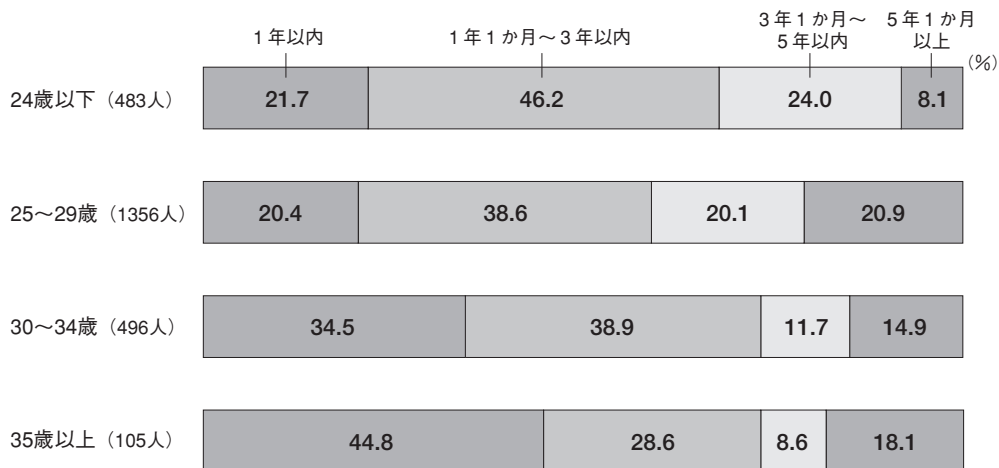
表1-1-2 結婚した理由(結婚時の年齢グループ別)

		(%)	
		妻全体	夫全体
子どもが予定外にできて しまったから	24歳以下 (妻493人/夫210人)	19.7	19.5
	25~29歳 (妻1374人/夫849人)	6.5	4.8
	30~34歳 (妻506人/夫526人)	6.7	5.1
	35歳以上 (妻109人/夫216人)	10.1	6.0
親を安心させたかったか ら	24歳以下 (妻493人/夫210人)	6.5	9.0
	25~29歳 (妻1374人/夫849人)	16.8	14.6
	30~34歳 (妻506人/夫526人)	24.5	20.5
	35歳以上 (妻109人/夫216人)	28.4	30.6
老後、独りではさびしい から	24歳以下 (妻493人/夫210人)	8.1	7.6
	25~29歳 (妻1374人/夫849人)	11.9	11.3
	30~34歳 (妻506人/夫526人)	17.0	12.4
	35歳以上 (妻109人/夫216人)	19.3	19.4
社会的信用が得られると 思ったから	24歳以下 (妻493人/夫210人)	2.0	2.4
	25~29歳 (妻1374人/夫849人)	2.0	6.9
	30~34歳 (妻506人/夫526人)	5.7	4.8
	35歳以上 (妻109人/夫216人)	2.8	11.1
結婚する年齢になったと 思ったから	24歳以下 (妻493人/夫210人)	16.2	14.8
	25~29歳 (妻1374人/夫849人)	38.6	37.1
	30~34歳 (妻506人/夫526人)	36.2	47.0
	35歳以上 (妻109人/夫216人)	29.4	37.5

注1) 複数回答。

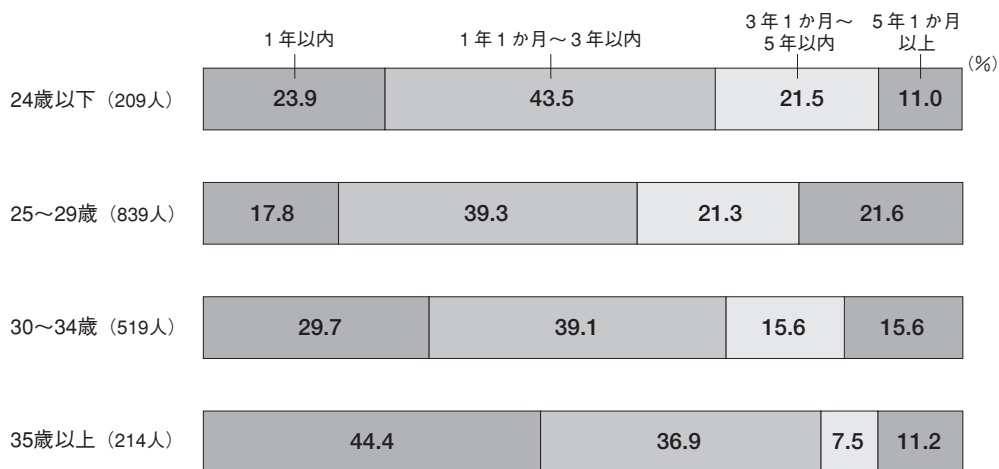
注2) 妻全体=妊娠期妻+育児期妻、夫全体=妊娠期夫+育児期夫。

図 1-1-1 交際期間（妻全体、結婚時の年齢グループ別）



注) 結婚時年齢、交際期間の「無答不明」は除く。

図 1-1-2 交際期間（夫全体、結婚時の年齢グループ別）



注) 結婚時年齢、交際期間の「無答不明」は除く。

●結婚から妊娠までの期間

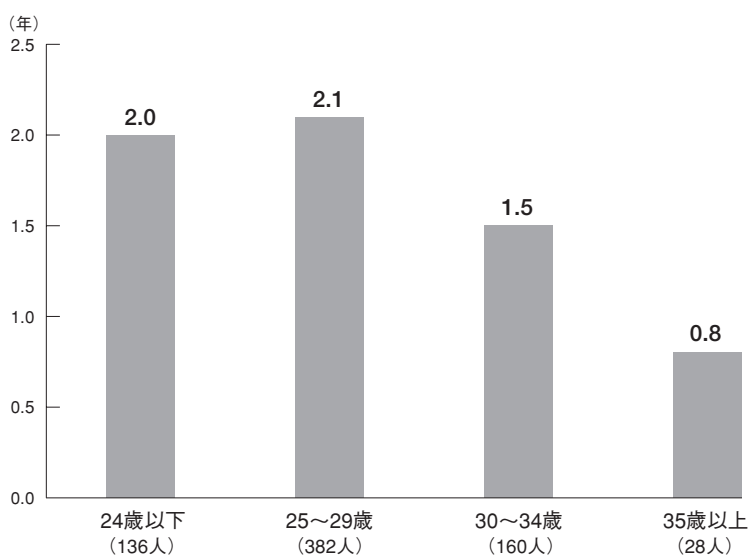
結婚してから今回の妊娠まで、どのくらいの間、夫婦は2人で過ごしたのだろうか。本調査では、妊娠期の妻と夫に、結婚時の年齢とおなかの赤ちゃんを妊娠したときの年齢をきいている。

結婚から今回の妊娠までの平均期間について、(妊娠時の満年齢)－(結婚時の満年齢)の値の平均値をとると、妊娠期妻は1.9年、妊

娠期夫は2.0年と、約2年であった*。

妊娠期妻について、結婚時の年齢グループ別に結婚から妊娠までの平均期間をみると(図1-1-3)、24歳以下と25～29歳のグループでは平均約2年だが、年齢グループが上がるにつれて結婚から妊娠までの期間は短くなり、35歳以上のグループでは結婚から妊娠までの平均値は1年未満であった。

図1-1-3 結婚から妊娠までの平均期間(妊娠期妻、結婚時の年齢グループ別)



*本調査では、結婚時と妊娠時の満年齢のみをきいており、月齢はきいていないので、平均期間に0～2年の幅があるため、参考数値としてとらえていただきたい。

● 妊娠の経緯

第1子の妊娠の経緯について、妊娠期、育児期をあわせた妻全体でみると、半数以上の54.9%は、妊娠の経緯を「自然にまかせていた」と回答している（図1-1-4）。「計画的に妊娠した」は24.1%、「子どもができなかったので、夫婦であるいはどちらかが不妊治療を受けた」は13.7%である。「望んではいなかったが、子どもができてしまった」は6.8%であった。

育児期妻の出産時の年齢グループ別（24歳以下、25～29歳、30～34歳、35歳以上）に妊娠の経緯をみると（図1-1-5）、どの年齢グループでも、約半数の妻は、「自然にまかせていた」と回答している（24歳以下53.7%、25～29歳56.4%、30～34歳53.5%、35歳以上47.5%）。「望んではいなかったが、子どもができてしまった」という予定外の妊娠は、24歳以下のグループは26.8%と約4人に1人いる。

仕事を持っている人と持っていない人で、妊娠の経緯に違いはあるのだろうか（図1-1-6）。妊娠期妻について、仕事を持っている人の「計画的に妊娠した」という回答率は26.2%で、仕事を持っていない人の22.9%と比べて大きな差はなかった。不妊治療による

妊娠についても、仕事を持っている人は14.9%、仕事を持っていない人は14.0%で、ほぼ同じ回答率であった。不妊治療は内容によっては仕事との両立が難しい場合があるといわれるが、本調査では仕事を持っている人と持っていない人で差はみられなかった。

● 不妊治療について

第1子の妊娠の経緯について、妻全体の13.7%が不妊治療によって子どもを授かっている（図1-1-4）。育児期妻の出産時の年齢グループ別に、夫婦であるいはどちらかが不妊治療を受けて妊娠した比率を比較すると、年齢グループが上がるにつれて比率が上がり、24歳以下では0.0%だが、25～29歳7.6%、30～34歳17.9%、35歳以上27.3%だった。35歳以上のグループでは、約4人に1人は夫婦であるいはどちらかが不妊治療を受けての妊娠である（図1-1-5）。

夫婦であるいはどちらかが不妊治療を受けて妊娠した妻（妊娠期妻+育児期妻 計354人）について、治療期間をみると、「1年～2年未満」がもっとも多く26.0%であった。ついで、「6か月～1年未満」が19.2%で、「6か月未満」が17.2%であった（図1-1-7）。

図1-1-4 妊娠の経緯（妻全体）

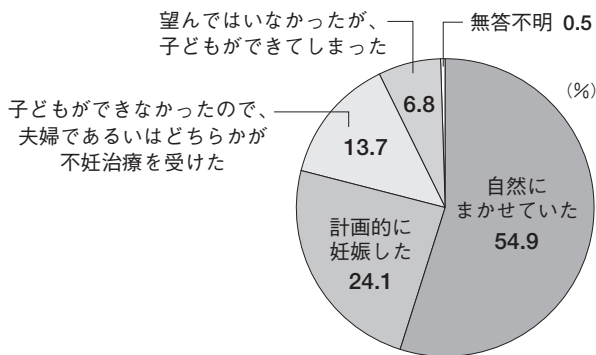
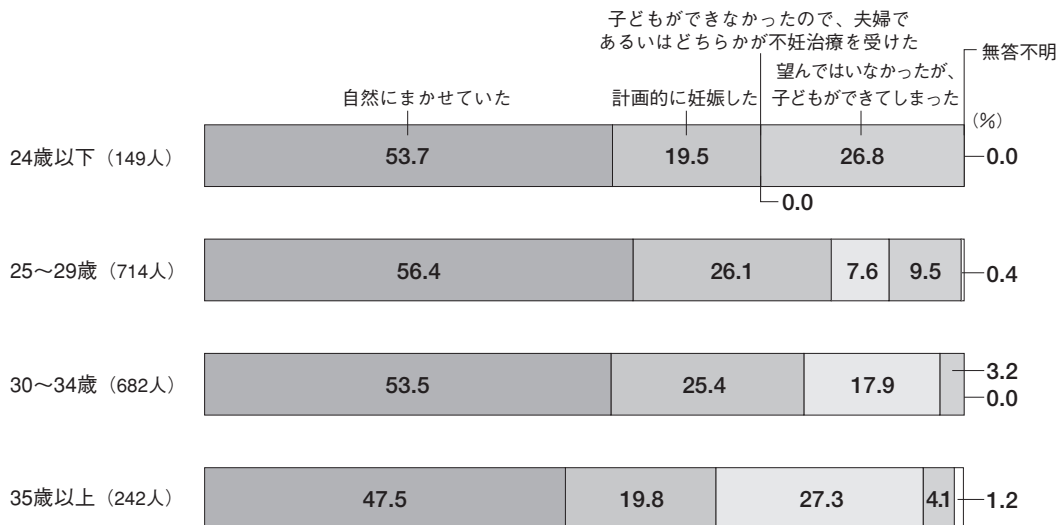
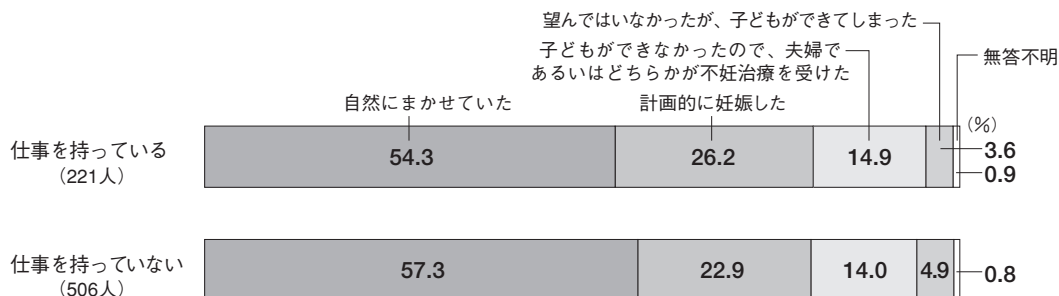


図1-1-5 妊娠の経緯（育児期妻、出産時の年齢グループ別）



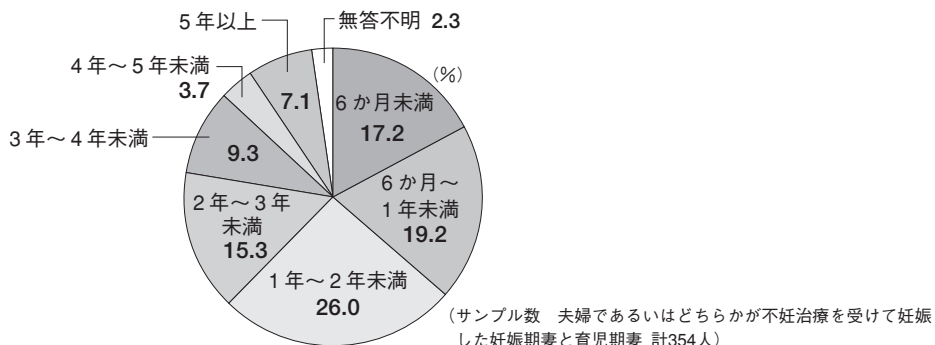
注) 出産時年齢の「無答不明」は除く。

図1-1-6 妊娠の経緯（妊娠期妻、仕事の有無別）



注) 仕事の有無の「無答不明」は除く。

図1-1-7 不妊治療期間



● 出産を決めた理由

第1子の出産を決めた理由について、17項目の中からあてはまるものを選んでもらった(複数回答)。表1-1-3は、妻(妊娠期妻+育児期妻)の回答率の高いものから順に並べたものである。

出産を決めた理由は、妻・夫(妊娠期夫+育児期夫)ともに「自分の子どもが欲しかったため」が妻79.7%、夫82.3%と突出して多く、以下「好きな人との子どもを持ちたかったから」(妻59.8%、夫52.8%)、「結婚して子どもを持つことは自然なことだから」(妻54.7%、夫59.1%)、「子どもがいると生活が豊かになり楽しくなると思ったから」(妻51.9%、夫48.5%)が続く。

ついで、「年齢的によりタイミングと感じたため」(妻44.9%、夫39.1%)、「年齢的にリミットを感じていたため」(妻23.5%、夫15.1%)と、年齢に関連する理由が続く。「子どもは予定外だったが、できてしまったため」という理由は、妻は10.9%、夫は5.9%であった。「仕事上、タイミングがよかったから」という仕事の都合による理由や、「経済的に子どもを持てるようになったから」という経

済的な理由は、妻・夫ともに順位は低かった。少子化の理由として、子どもの養育や教育にかかる経済的な負担が挙げられることがあるが、本調査では、経済力がついたことは、はじめての子どもの出産を決めた主な理由ではないようである。

出産を決めた理由について、妻と夫で回答率に大きな差があるのは、「夫婦2人の生活を十分楽しんだから」(妻が多く、9.6ポイントの差)と、「年齢的にリミットを感じていたため」(妻が多く、8.4ポイントの差)である。妊娠できる年齢にリミットがある女性のほうが、年齢を強く意識しているようである。

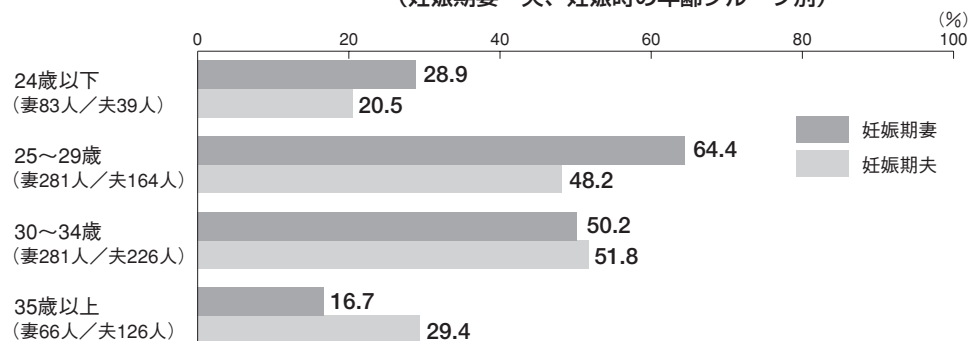
年齢に関連する理由の回答率について、妊娠期の妻と夫を妊娠時の年齢グループ別にみると、「年齢的によりタイミングと感じたため」と答えている割合は、妻は25~29歳のグループ(64.4%)、夫は30~34歳のグループ(51.8%)がもっとも多かった(図1-1-8)。「年齢的にリミットを感じていたため」を理由に挙げている割合は、妻・夫ともに35歳以上のグループがもっとも多かった(妻78.8%、夫41.3%)(図1-1-9)。

表 1-1-3 おなかの赤ちゃん／○○ちゃんの出産を決めた理由

	妻全体	夫全体
自分の子どもが欲しかったため	79.7	82.3
好きな人との子どもを持ちたかったから	59.8	52.8
結婚して子どもを持つことは自然なことだから	54.7	59.1
子どもがいると生活が豊かになり楽しくなると思ったから	51.9	48.5
年齢的によいタイミングと感じたため	44.9	39.1
年齢的にリミットを感じていたため	23.5	15.1
夫婦2人の生活を十分楽しんだから	19.5	9.9
自分よりも配偶者のほうが子どもを欲しがっていたため	11.2	14.6
子どもは予定外だったが、できてしまったため	10.9	5.9
子どもは夫婦関係を安定させるため	8.8	9.9
やりたいことはすべてやったため	8.2	2.5
子どもは将来の社会の支えとなるため	7.0	13.3
子どもは自分たちの老後の支えになるため	5.2	5.9
工作上、タイミングがよかったから	4.8	1.6
経済的に子どもを持てるようになったから	4.4	6.9
跡継ぎが必要だったため	3.0	6.0
その他	3.6	1.2

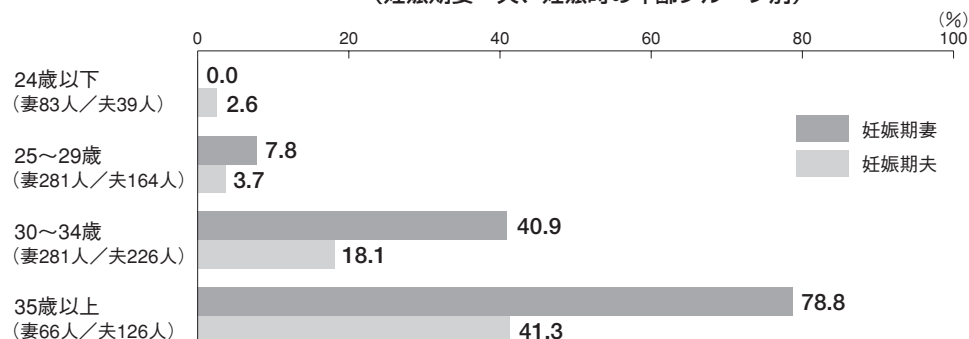
注) 複数回答。

図 1-1-8 出産を決めた理由「年齢的によいタイミングと感じたため」
(妊娠期妻・夫、妊娠時の年齢グループ別)



注) 妊娠時年齢の「無答不明」は除く。

図 1-1-9 出産を決めた理由「年齢的にリミットを感じていたため」
(妊娠期妻・夫、妊娠時の年齢グループ別)



注) 妊娠時年齢の「無答不明」は除く。

妊娠中の生活・ 親になるための準備

核家族化、少子化が進行する中で、赤ちゃんや子どもに身近に接したり世話をしたりする機会がないまま親になる人は多い。経験不足を補うためには、妊娠中から母親学級などで出産・育児について学ぶことは重要である。この節では、妻・夫の赤ちゃんとの触れ合い経験や、妊娠・出産準備プログラムへの参加など、親になるための準備についてみてみたい。なお、妊娠・出産に関する人的な相談相手や情報収集先については、第4章「子育ての環境」で扱っているのであわせて参照されたい。

● 出産への期待と不安

妊娠期の妻と夫は、妊娠がわかったときや、妊娠中の生活の中で、どのような気持ちで過ごしているのだろうか。図1-2-1、図1-2-2は、妻には16項目、夫には11項目の質問を、肯定的なものとするものと否定的なものに分け、「あてはまる」の回答率の高いものからそれぞれ並べたものである。

妻・夫ともに、「おなかの赤ちゃん／配偶者のおなかの赤ちゃんをいとおしく感じる」「おなかの赤ちゃん／配偶者の妊娠がわかったとき、うれしかった」という気持ちは、「あてはまる」のみで80%を超えている。妻・夫ともに、おなかの赤ちゃんへの愛情と、妊娠を肯定的に受け止める気持ちは大変強いことがわかる。

妻は、「現在、妊娠していることがうれしい」が「あてはまる」のみで77.9%と、妊娠

している状態を肯定的に受け止めながらも、「お産の時の痛みが怖い」「お産が不安である」「妊娠の経過が順調であるかどうか不安である」という妊娠中の体調や出産についての項目は、「あてはまる」「ややあてはまる」をあわせると7割以上が不安を感じている。

夫も、「生まれてくる赤ちゃんのことを想像すると、わくわくする」は76.3%が「あてはまる」と回答し、妻同様、妊娠に対して肯定的に受け止めているが、「出産の時の配偶者のことや赤ちゃんの出産が無事済むか心配である」については、「あてはまる」のみで64.9%の回答率であり、配偶者や生まれてくる子どものことを案じている。

「母親になることに不安がある」「父親になることに不安がある」という、親役割に対する不安は、妻の48.2%、夫の41.4%が感じている（「あてはまる」＋「ややあてはまる」）。

図1-2-1 妊娠中の気持ち (妊娠期妻)

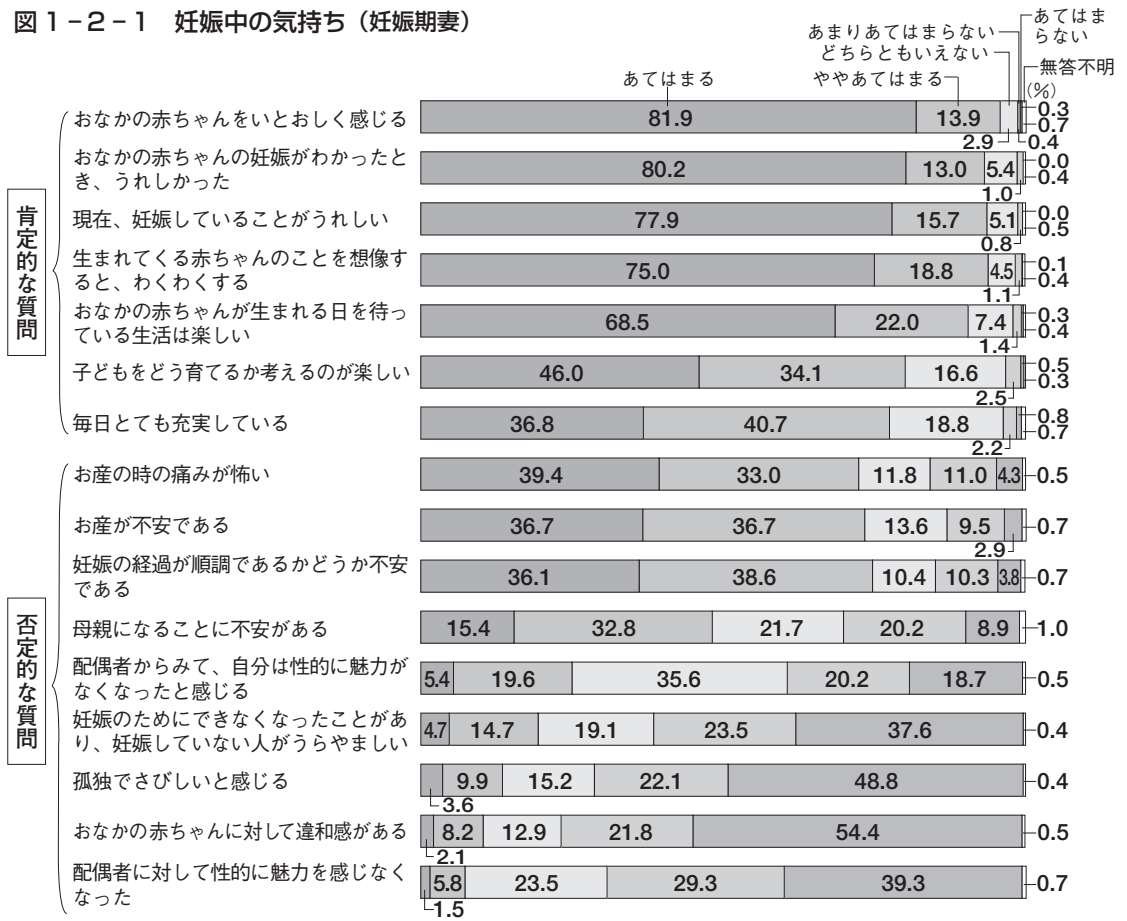
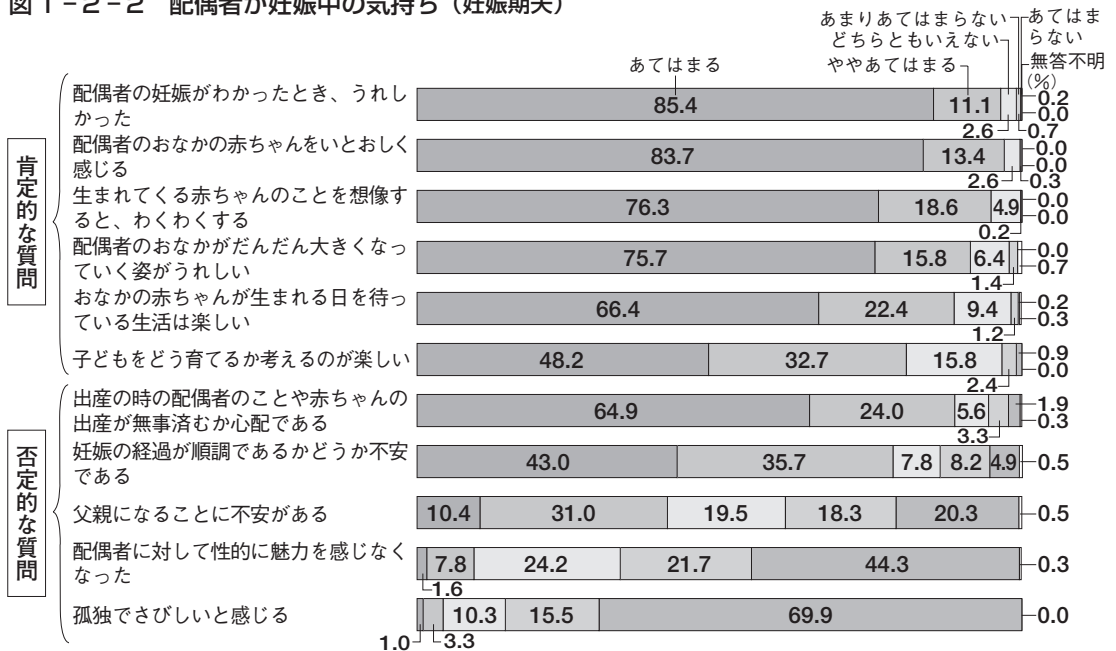


図1-2-2 配偶者が妊娠中の気持ち (妊娠期夫)



●赤ちゃんとのお触れ合い経験

はじめて親になる妻・夫は、自分の子どもを持つ前に、赤ちゃんに身近に接したり、世話をしたりする機会があったのだろうか。「子どものころから今まで（第1子を妊娠するまで／生まれるまで）に赤ちゃんに身近に接したり世話をする機会がありましたか」という質問に対して、妊娠期、育児期をあわせた妻全体では47.1%、夫全体では54.6%が「いいえ」と回答した（図1-2-3）。妻・夫とも、約半数の人が、赤ちゃんとの触れ合い経験がないまま親となっている。

●妊娠や出産準備に関するプログラムへの参加

はじめて親になる妻・夫にとって、病院や自治体などが主催する妊娠や出産準備に関するプログラム（母親／父親学級、学習会、セミナーなど）への参加、プログラムの内容の充実は、親になるための準備として重要なものである。

育児期妻に、妊娠中の病院や地域主催の母親学級への参加についてきいたところ（図

1-2-4）、参加した人は85.9%にのぼった。配偶者と2人での病院や地域主催の両親学級への参加については、約半数の50.5%が参加していた。

妊娠期妻では、妊娠や出産準備に関するプログラムに参加したことがある割合は、「病院主催のプログラム」がもっとも高く73.1%である（図1-2-5）。ついで、「行政主催のプログラム」が42.4%、「民間の団体主催のプログラム」は16.6%が参加している。妊娠期夫の参加率は、「病院主催のプログラム」が31.5%、「行政主催のプログラム」が29.4%、「民間の団体主催のプログラム」は、わずか8.2%であった。

参加したプログラムに対する妊娠期妻の満足度は高く、「非常に満足した」と「まあ満足した」をあわせると、「病院主催のプログラム」は87.4%、「行政主催のプログラム」は87.0%、「民間の団体主催のプログラム」は81.8%であった（図1-2-6）。妊娠期夫については、「行政主催のプログラム」の満足度がもっとも高く、「非常に満足した」と「まあ満足した」をあわせて87.6%であった。

図1-2-3 赤ちゃんとのお触れ合い経験があったか

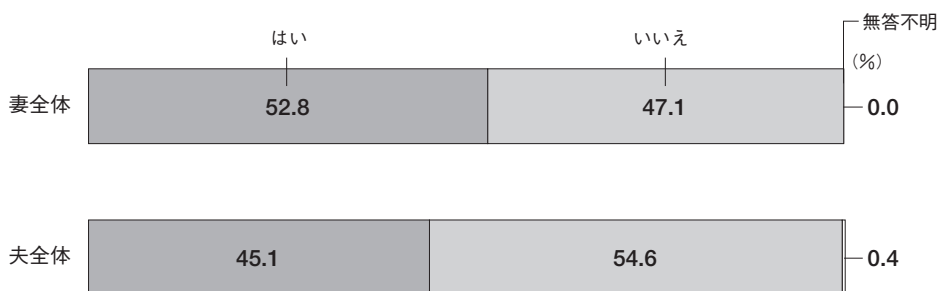


図1-2-4 妊娠中に母親学級／両親学級に参加したことがあるか（育児期妻）

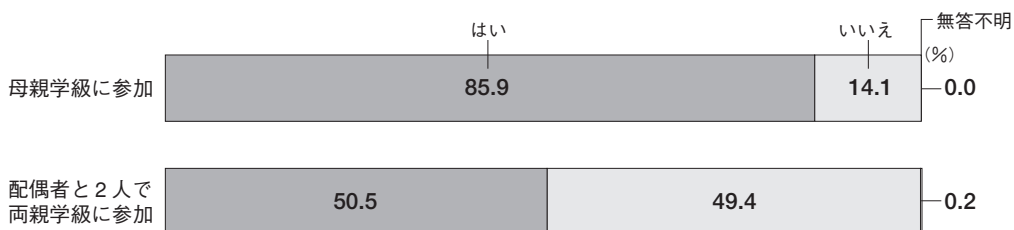


図1-2-5 妊娠や出産準備に関するプログラムへの参加（妊娠期妻・夫）

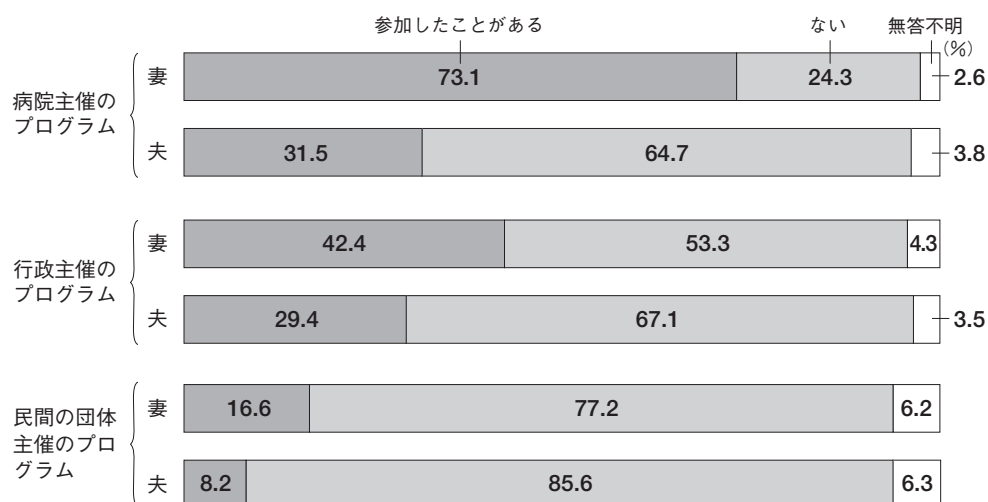
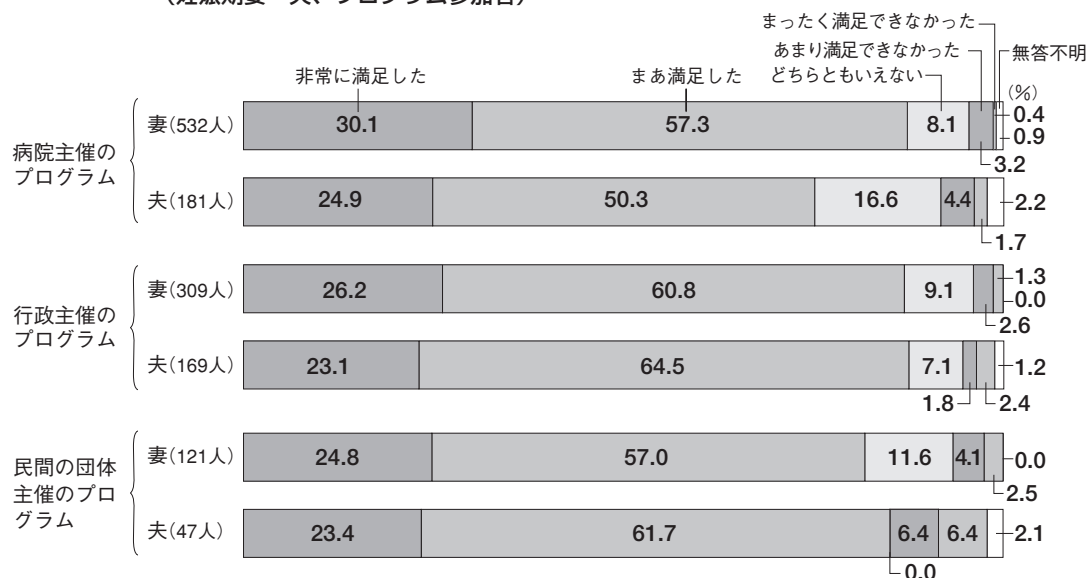


図1-2-6 妊娠や出産準備に関するプログラムに対する満足度（妊娠期妻・夫、プログラム参加者）



●妊娠中の生活

妊娠中の体調管理や親になるための準備をどのように行っているのだろうか。アンケートでは、妊娠期妻に、食生活や、飲酒・喫煙習慣、育児情報の収集などの行動についてきいている。「体重過多や妊娠中毒症の予防などのために食生活に気を配っている」がもっとも高く、29.3%が「しばしばある」、36.8%が「時々ある」と回答している(図1-2-7)。次に高いのは、「育児書を読むなど、子育て情報を集めている」という子育ての準備行動で、29.4%が「しばしばある」、29.5%が「時々ある」と回答している。胎教やマタニティスイミングなどの妊婦向けの運動という積極的な活動をする人は、全体の約2割である(「しばしばある」+「時々ある」)。喫煙は95.3%、

飲酒は84.2%が「まったくない」と回答している。

妊娠期夫には、子育て情報の収集と配偶者と一緒のときの喫煙の有無についてきいている(図1-2-8)。「育児書を読むなど、子育て情報を集めている」人は、「しばしばある」と「時々ある」をあわせて35.7%で、妻より23.2ポイント低い。「配偶者と一緒のときにたばこを吸うことがある」については、6割以上の夫が「まったくない」と回答しているが、約1割は「しばしばある」と回答している(ただし、普段の喫煙習慣についてはきいていないため、喫煙はするが妻の前では控えている人と、もともと喫煙しない人との区別はできない)。

図 1-2-7 妊娠中の生活（妊娠期妻）

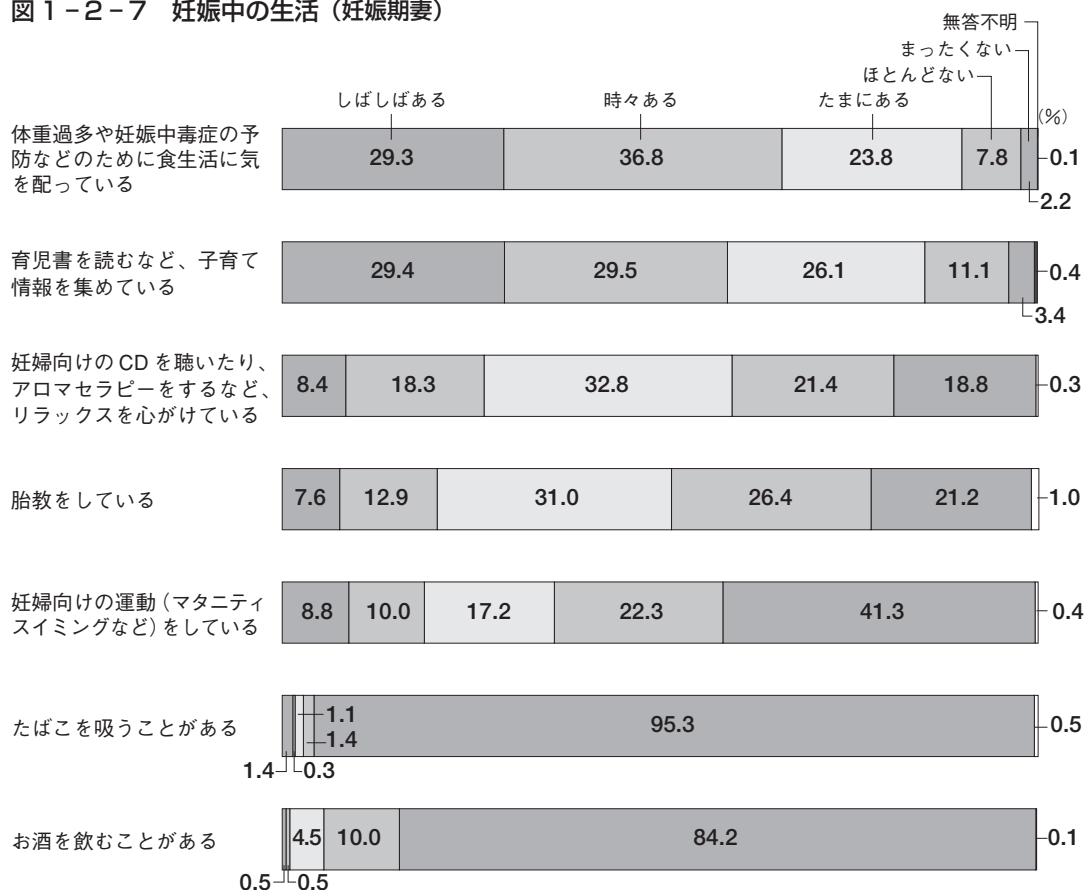
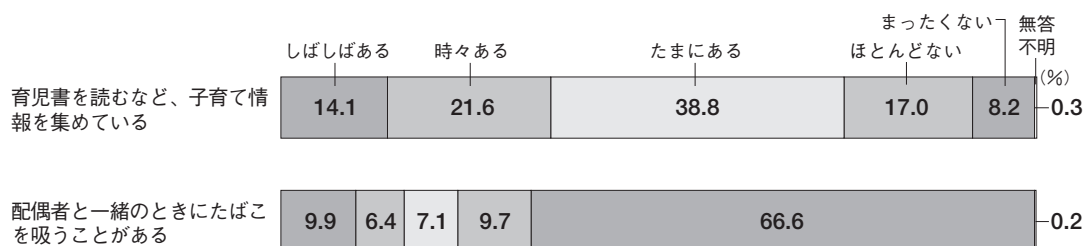


図 1-2-8 配偶者が妊娠中の生活（妊娠期夫）



出産の実態・出産体験についての振り返り

第3節では、出産した施設と選んだ理由、里帰り出産の有無、配偶者のお産への立ち会いの希望と実態、出産体験の振り返りなど、はじめての子どもの出産にかかわる実態についてみていきたい。

● 出産する施設と選んだ理由

妊娠期妻には今回の出産を予定している施設について、育児期妻には出産した施設についてきいた（図1-3-1）。妊娠期妻の98.2%が、病院での出産を予定している（「開業医の産院」59.9%、「総合病院・大学病院の産婦人科」38.3%）。「助産院」での出産を予定している人は1.2%である。育児期妻も同様の傾向で、55.6%が「開業医の産院」で、41.8%が「総合病院・大学病院の産婦人科」で出産した。「助産院」での出産は1.8%であった。

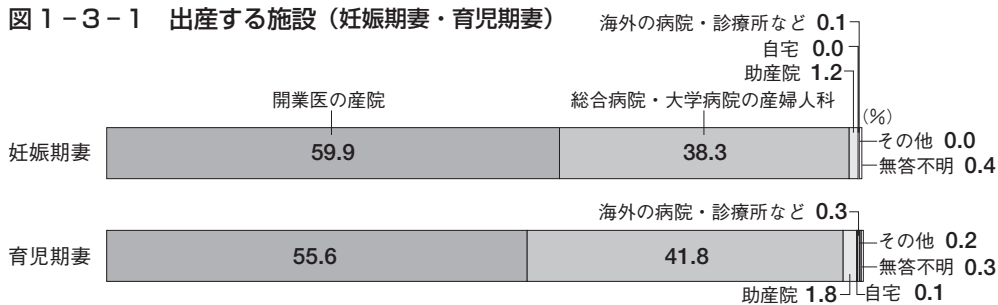
妊娠期妻には、出産する施設を決めた理由について15項目の中からあてはまるものを複数回答で選んでもらった（図1-3-2）。「自宅（または里帰り先の実家）から近いから」が66.3%と選択理由として突出している。ついで、「評判がよいから」42.9%、「設備やサービスが充実しているから」25.0%、「総合病院で小児科も併設しているから」23.1%

が続く。その他の理由には、「人にすすめられたから」14.8%、「母子同室制だから」13.3%、「母乳育児に力を入れているから」11.3%、「有名だから」10.9%が挙がっており、入院中の母子へのケアや施設の知名度を重視して出産する施設を選ぶ傾向もみられた。

「その他」を選んだ145人の自由記述をみると、「（婦人科の治療や不妊治療などで）妊娠前から通っていた病院だから」27人、「親、親族が出産した病院だから」26人、「医師や病院に対する信頼・女医がいるから」22人という選択理由が主なものである。「産院・産科医不足で、選択の余地がない」21人という切実な意見もみられた。

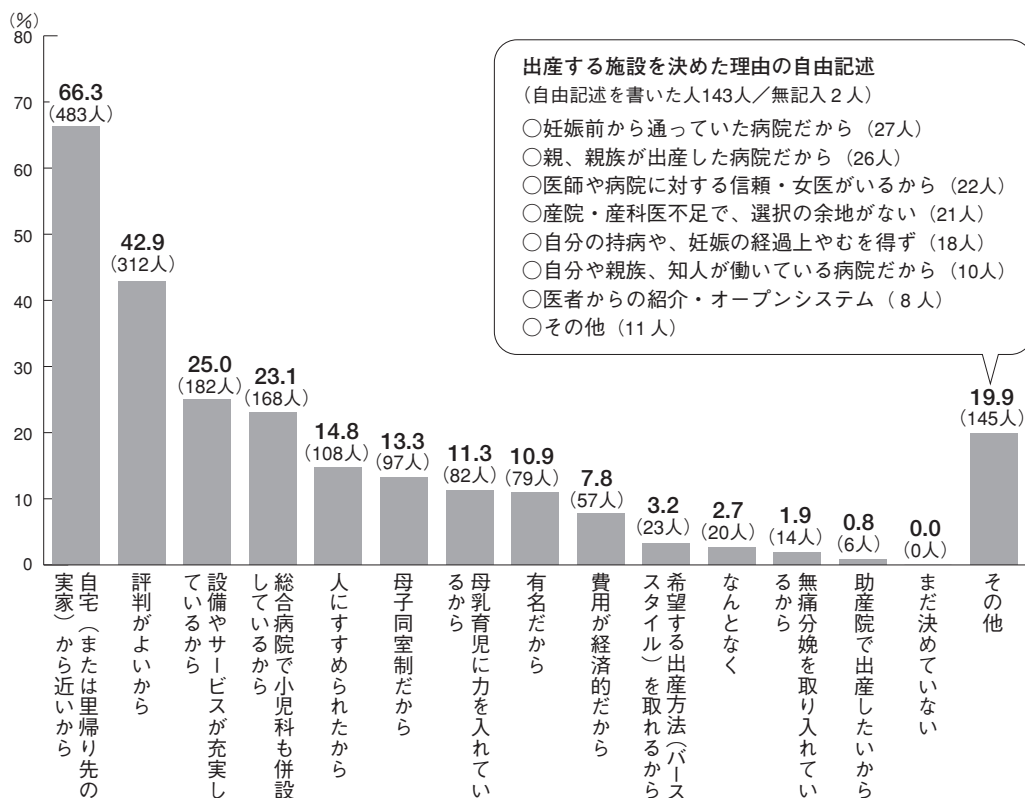
通院に関しては、育児期妻に「産院が遠く、通院が大変だったか」をたずねている（図1-3-3）。「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した妻は20.6%で、約5人に1人が出産施設への通院の不便を訴えている。

図1-3-1 出産する施設（妊娠期妻・育児期妻）



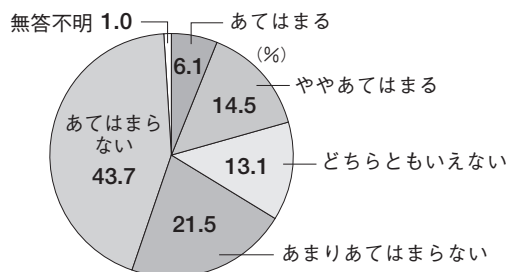
注) 妊娠期妻のみ「まだ決めていない」0.0%。

図1-3-2 出産する施設を決めた理由（妊娠期妻）



注) 複数回答。

図1-3-3 産院が遠く、通院が大変だったか（育児期妻）



● 里帰りの有無

妊娠期妻に里帰りの予定、育児期妻に里帰りの有無をきいた（図1-3-4）。妊娠期妻は、34.6%が里帰りを予定し、63.9%は里帰りをしない予定、と回答している（妊娠期妻のみ「まだ決めていない」1.4%という選択肢が含まれている）。

育児期妻は、41.9%が出産に際して里帰りをし、57.9%は里帰りをしなかった。里帰りした人のうち、66.5%は出産前から実家へ里帰りし、「里帰り先」で出産しているが、23.4%の人は、出産を「自宅のある地域」で行い、出産後、実家へ里帰りして過ごしている（図1-3-5）。

● 夫の出産への立ち会い

図1-3-6は、育児期夫の出産への立ち会い状況をみたものである。これによると、54.1%が出産に立ち会っている（「した」53.0%＋「したくなかったけれどした」1.1%）。「したかったけれどできなかった」夫は25.8%で、出産への立ち会いに肯定的な夫（「した」＋「したかったけれどできなかった」）は、78.8%にのぼる。逆に、出産への立ち会いに否定的な夫は20.5%と、約5人に1人いる（「しようと思わなかったし、しなかった」19.4%＋「したくなかったけれどした」1.1%）。

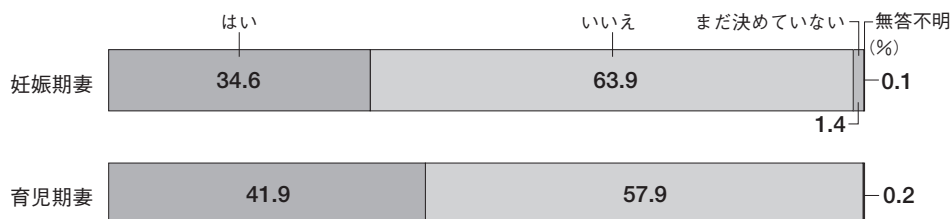
妊娠期の妻と夫には、出産の立ち会いへの希望をきいた（図1-3-7）。妊娠期妻は、57.9%が配偶者の出産への立ち会いを希望し

ている（「あてはまる」41.3%＋「ややあてはまる」16.6%）。妊娠期夫も、57.4%が立ち会いを希望しており（「あてはまる」40.0%＋「ややあてはまる」17.4%）、妻と夫の立ち会いへの希望はほぼ一致している。妻の中には夫の立ち会いを望まない人も5人に1人いる（「あまりあてはまらない」6.2%＋「あてはまらない」15.5%）。

● 出産体験の振り返り

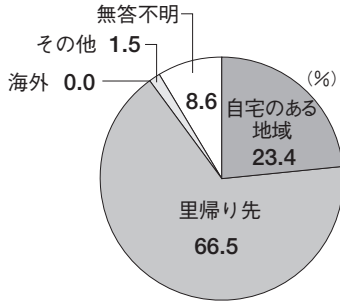
育児期妻は、現在の配偶者とはじめての出産体験について、どのような感想を持っているだろうか。図1-3-8は、出産体験に関する肯定的な感情について、それぞれあてはまる度合いをきいたものである。育児期妻の約半数の49.1%が、「お産全体を通して、リラックスすることができた」と回答している（「あてはまる」15.5%＋「まああてはまる」33.6%）。また、45.1%が「お産の間、幸せな気持ちがあった」と回答している（「あてはまる」19.6%＋「まああてはまる」25.5%）。はじめての子どもの出産に、約半数の育児期妻はリラックスし、肯定的な感情を持って臨んでいたことがわかる。出産の進行は、個人差もあり、また事前に呼吸法などを練習していても予想した通りに進まないことがあるが、「お産を自分でコントロールすることができた」と回答した育児期妻は、約4人に1人であった（「あてはまる」5.8%＋「まああてはまる」18.8%）。

図1-3-4 里帰りの有無（妊娠期妻・育児期妻）



注)「まだ決めていない」は、妊娠期妻のみの項目。

図1-3-5 里帰りした人が出産した地域 (育児期妻)



(サンプル数 里帰りをした人 779人)

図1-3-6 夫の出産への立ち会い (育児期夫)

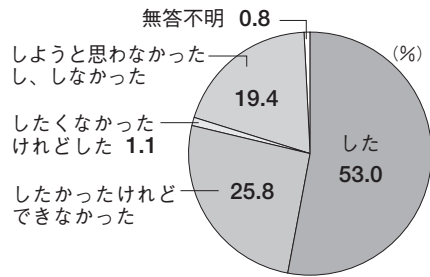


図1-3-7 夫の出産への立ち会いの希望 (妊娠期妻・夫)

* 妊娠期妻「私は、配偶者に出産に立ち会ってほしいと思っている」

* 妊娠期夫「私は、出産への立ち会いを希望している」

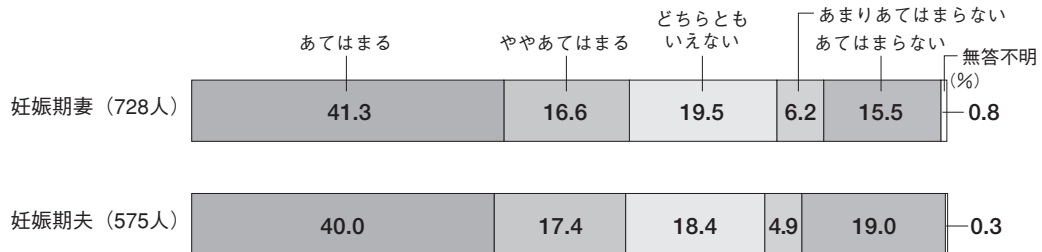
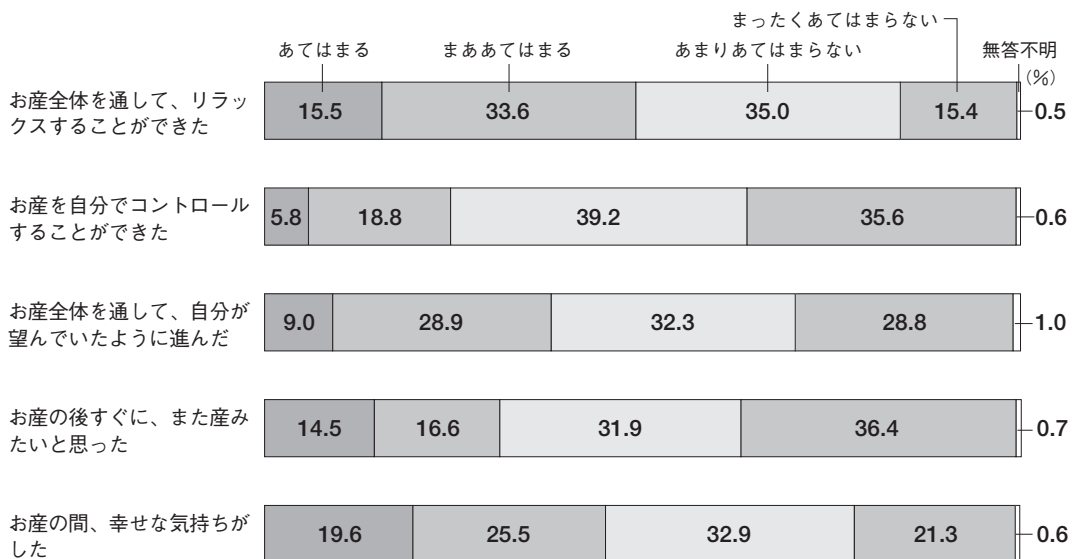


図1-3-8 出産体験の振り返り (育児期妻)



子どもの数と性別についての希望

第4節では、家族計画について、妻・夫それぞれの、理想の子ども数と性別についてみていきたい。

●理想の子ども数

理想の子ども数はさまざまな調査で報告されているが、本調査ではどうだろうか。妊娠期の妻と夫、育児期の妻と夫のすべての属性で、理想の子ども数は「2人」がもっとも多く、ついで「3人」であった(表1-4-1)。すでに出産を経験した育児期妻と、まだ子どもは生まれていない妊娠期妻で比較すると、育児期妻のほうが、「2人」を理想とする回答率が低い。

妻の仕事の有無と理想の子ども数についてみると、妊娠期妻、育児期妻ともに、仕事を持っている人のほうが理想の子ども数を「3人以上」(「3人」+「4人以上」)と回答する率が仕事を持っていない人よりも高い(妊娠期妻は、差が7.6ポイント、育児期妻は、差が7.9ポイント)(図1-4-1)。

●希望する子どもの性別・組み合わせ

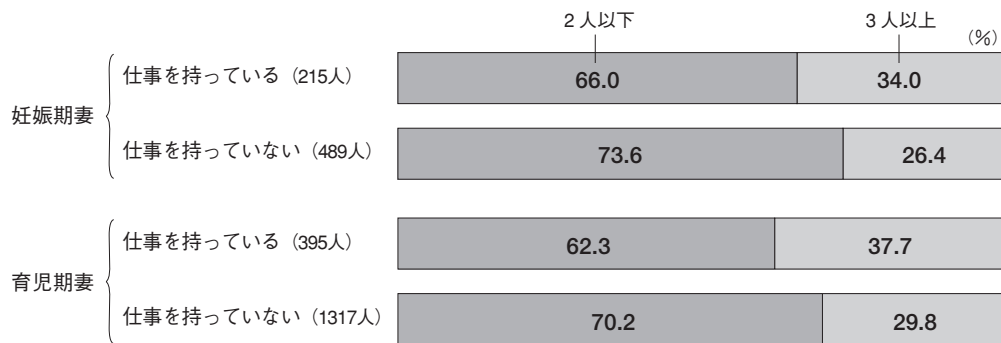
図1-4-2は、妻・夫それぞれに、子どもの性別や組み合わせに理想があるかどうかをきいたものである。妊娠期妻の74.2%、夫の69.9%が性別や組み合わせに「理想がある」と答えている。育児期妻は66.6%、夫は63.6%で第1子が生まれると、理想へのこだわりはやや薄れるようだ。

「理想がある」と回答した人には、理想の性別と組み合わせをきいた(表1-4-2)。妊娠期妻・夫、育児期妻・夫、すべての属性で、「男の子・女の子1人ずつ」を理想とするケースがもっとも多かった。ついで、子どもの数は「3人」で、「男の子と女の子の両性」を理想とするケースが多い。子ども数「3人」を希望する場合には、妊娠期、育児期とも、妻は「女の子2人と男の子1人」、夫は「男の子2人と女の子1人」と、自分と同じ性の子を多く希望する傾向がみられた。

表1-4-1 理想の子ども数

	妊娠期妻	妊娠期夫	育児期妻	育児期夫
0人	0.0	0.0	0.1	0.0
1人	3.8	3.0	6.6	4.3
2人	65.1	61.6	57.8	60.8
3人	27.2	26.8	28.4	25.8
4人以上	0.7	2.3	1.5	2.4
希望する性別の子が生まれるまで何人でも	0.1	0.5	0.2	0.3
特に理想はない	3.0	5.9	5.2	5.9
無答不明	0.0	0.0	0.3	0.6

図 1-4-1 理想の子どもの数（妊娠期妻・育児期妻、仕事の有無別）



注1) 仕事の有無についての「無答不明」は除く。
 注2) 理想とする子どもの数は、「希望する性別の子が生まれるまで何人でも」と「特に理想はない」の回答と「無答不明」は除く。
 注3) 2人以下=「0人」+「1人」+「2人」、3人以上=「3人」+「4人以上」。

図 1-4-2 子どもの性別や組み合わせに理想があるか

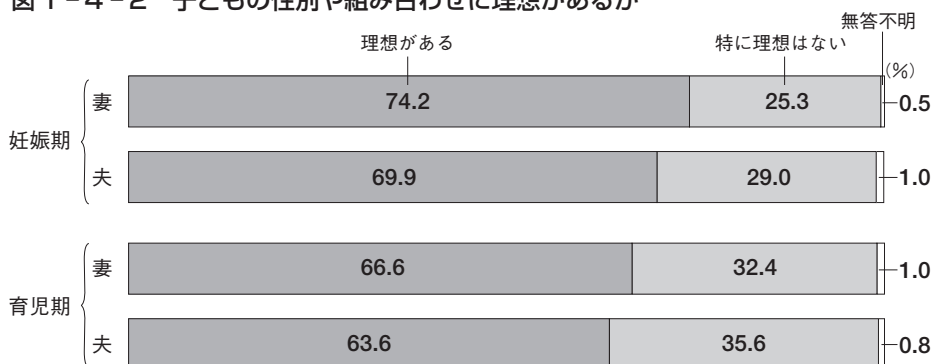


表 1-4-2 理想の子どもの数・性別の組み合わせ

妊娠期妻 (540人)		妊娠期夫 (402人)		育児期妻 (1239人)		育児期夫 (837人)	
男0女1	1.9	男0女1	1.5	男0女1	2.4	男0女1	1.6
男0女2	3.5	男0女2	1.0	男0女2	7.3	男0女2	1.1
男0女3	0.2	男0女3	0.5	男0女3	1.3	男0女3	0.2
男1女0	0.4	男1女0	0.2	男1女0	0.6	男1女0	1.0
男1女1	72.6	男1女1	69.9	男1女1	59.7	男1女1	66.1
男1女2	12.2	男1女2	8.7	男1女2	15.4	男1女2	8.5
男2女0	0.2	男2女0	0.7	男1女3	0.1	男1女3	0.2
男2女1	7.6	男2女1	15.2	男2女0	1.1	男2女0	1.7
男2女2	0.7	男2女2	1.2	男2女1	9.4	男2女1	16.2
男3女0	0.2	男3女0	0.2	男2女2	1.5	男2女2	2.0
無答不明	0.6	男3女2	0.5	男2女3	0.1	男2女3	0.1
		無答不明	0.2	男3女0	0.3	男3女0	1.0
				男3女2	0.1	男3女2	0.1
				男3女3	0.1	無答不明	0.2
				無答不明	0.5		

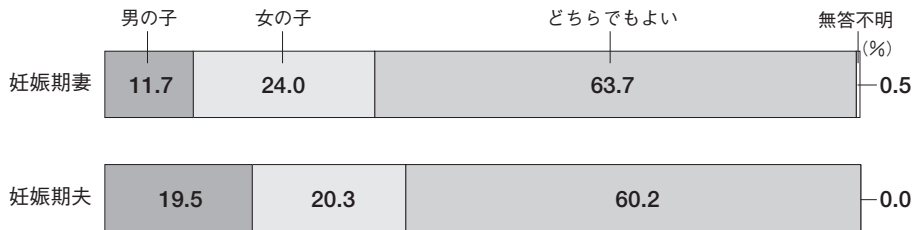
注) 子どもの性別や組み合わせに「理想がある」と回答した人のみ。

● 今回の妊娠・出産に希望する性別と結果

図1-4-3は、妊娠期の妻と夫に、これから生まれる子どもの性別に関する希望をきいたものである。妊娠期妻・夫とも、6割以上は「どちらでもよい」と回答している。特定の性別を希望している場合、妊娠期夫は

「男の子」と「女の子」を望む率が、ほぼ同じだが（「男の子」19.5%、「女の子」20.3%）、妊娠期妻は、「男の子」11.7%に対して「女の子」24.0%と、「女の子」を望む率が大きく上回っている。

図1-4-3 おなかの赤ちゃんに望む性別（妊娠期妻・夫）



参考資料

プレママ441人の声

～妊娠期妻のフリーアンサーより～

今回の調査では、「妊娠や出産に関することで、困っていることや、行政や職場、地域社会に期待すること、あったらよいと思っているサービス」などについて、自由に記述できるスペースを設けた。妊娠期妻の回答者441人の自由記述をまとめた（1人で複数の意見を書いていることが多いため、コーディングした意見は延べ件数で集計している）。

●健診・出産・不妊治療への助成

妊娠後期の妻たちがかもっとも多く寄せた声は、妊娠・出産・不妊治療に関する金銭的な助成への要望であった。健診や検査への保険適用や無料化への要望がかもっとも多い（213件）。ついで、出産費用が高いという不満や無料化への要望、一時金の出産前の支給に関する要望が続く（100件）。不妊治療への助成の要望も14件あった。健診や出産への助成の内容や金額が自治体によって差があることについても、全国一律にしてほしいという意見があった。

●妊婦への思いやり

電車やバスなどの公共交通機関で席を譲ってもらえないという不満が多かった（45件）。さらに、妊娠中であることを知らせるための「マタニティマーク」をつけていても席を譲ってもらえなかったという声も別に11件あり、マークの普及、啓蒙を求める声は、あわせて19件あった。

●病院に関すること

「病院・医師が少なく、健診に時間がかかる」「医師不足で近くに産科がなく、車で30分かけて通院している」「里帰りを希望していたが、帰省先の県は産婦人科が激減しており、諦めた」など、産院の減少に伴う不便を感じている意見が45件と多かった。

●職場・行政・社会に希望すること

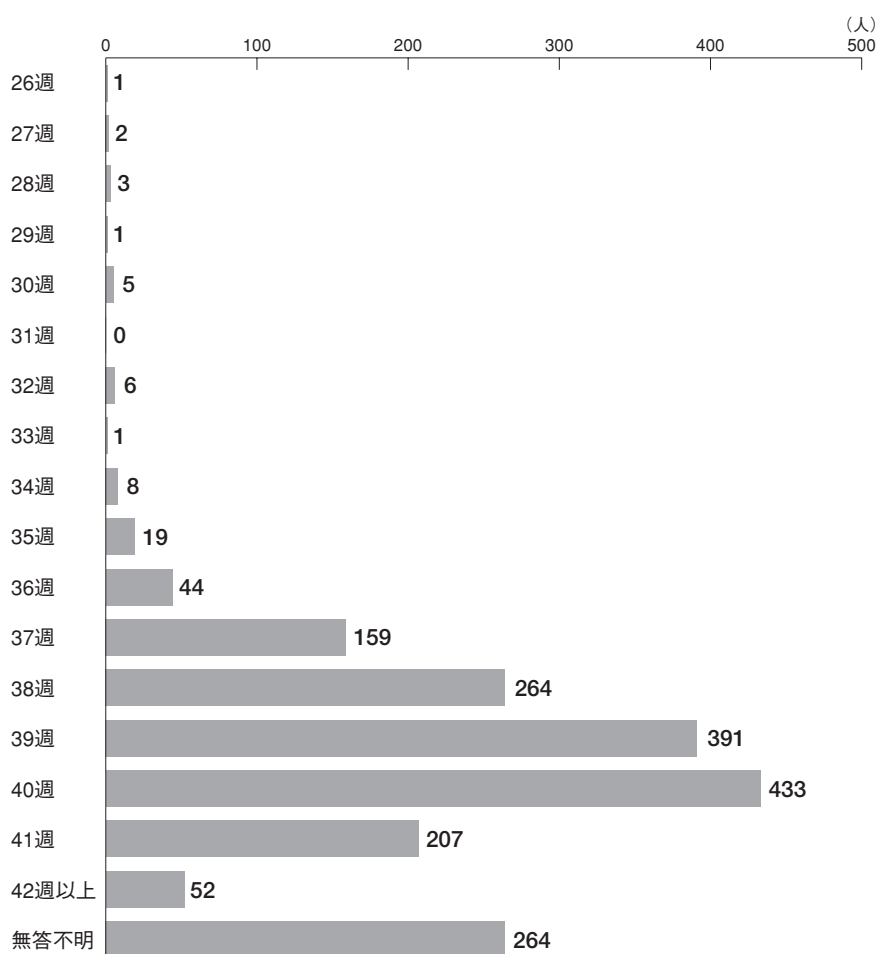
「悩みや不安を相談できる施設・サービスがほしい」「近くに保育所がない」などの行政による育児支援を求める声が多い。また、「夫が育児休業を取得できれば、親子関係・夫婦関係がかもっとよいものになると思う」「夫が定時で帰れる社会のシステム」など、核家族化の進行もあり、配偶者が育児参加しやすい社会を求める声もあった。また、仕事と職場に関しては、「妊娠初期のころ、職場の理解が得られず無理して働いた」「産前6週の出産を8週間前からとれるようにしてほしい」など、妊娠と仕事の両立のしやすさを求める声があった。

出産の実態

育児期妻の調査結果から、出産や新生児に関するデータを参考値として紹介する。

1. 在胎週数

在胎週数は、出産予定日（40週0日）を含む40週での出産が433人（23.3%）と最も多い。

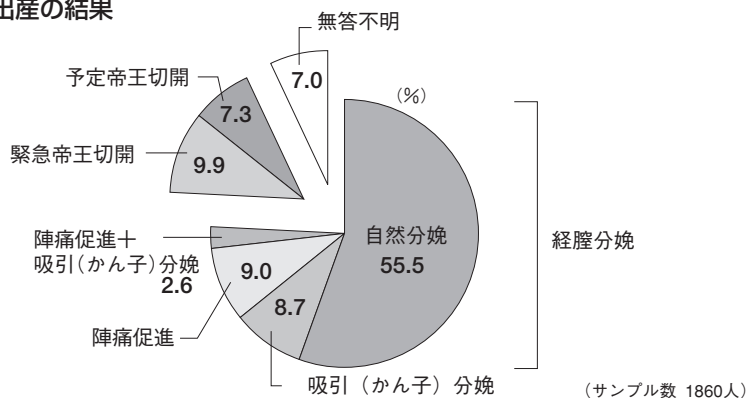


(サンプル数 1860人)

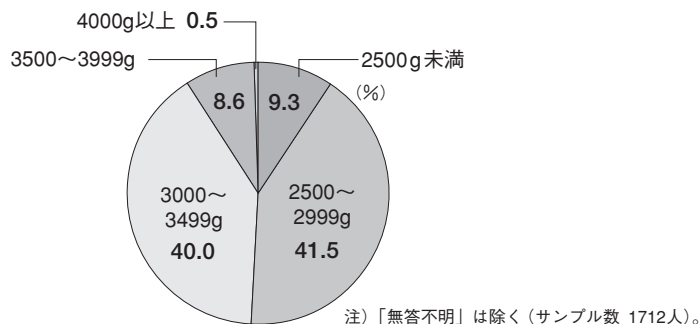
2. 分娩の実態

75.8%が「経陰分娩」（「自然分娩」55.5%＋「吸引（かん子）分娩」8.7%＋「陣痛促進」9.0%＋「陣痛促進＋吸引（かん子）分娩」2.6%）で出産し、9.9%が「緊急帝王切開」、7.3%が「予定帝王切開」で出産した。吸引（かん子）を行った人は全体の11.3%、陣痛促進をしたうえでの出産は11.6%であった。陣痛促進や吸引（かん子）の処置をしたうえ、緊急帝王切開になった人も、わずかだが9人いた。

出産の結果



3. 出生時の体重



4. 産院入院中の出生児への治療の有無

これは、産院入院中に、生まれた子どもに光線療法、投薬治療などの治療や、保育器での治療が行われたかどうかをきいたものである。

	割合 (%)		
	あり	なし	無答不明
出生児への治療	20.4	73.8	5.8

(サンプル数 1860人)

5. 分娩時間の平均

	平均値
分娩時間	10時間40分 (640.6分)

注)「無答不明」は除く(サンプル数 1336人)。